

第 16 節 ぶり飼付け漁業

1. 沿革

明治時代、本県のぶり漁は富山県と並ぶ全国有数の生産地として知られた。

元来この漁法は、明治の初めごろ¹⁾、知覧村の漁夫が従来の活餌釣りを工夫改良して始まったとされる。「かぶし」と称し、川辺郡、指宿郡を中心に発達した。最初は知覧村塩屋の松ヶ浦や、頼娃村の川尻(現在の開聞町)で盛んに行われていたが、その後、枕崎、坊浦、加世田郷の各浦に広がった。

このころの「かぶし釣り」は1~3つの浦の漁業者が組合を組織し、漁船10数隻で経営した(関係市町村郷土誌)。

ぶり飼付けの起業状況³⁾

地名	漁場名	起業年次	備考
川辺郡枕崎	阿知曾根	明治11年	明治15年~同38年まで盛大県下無比。20年54万尾、16万円
〃 坊泊	富貴曾根	〃 13年	明治29年19万3千尾、13万2千円
〃 久志	三宝曾根	〃 26年	
〃 片浦	広曾根	〃 18年	旧藩時代に創業の説あり。明治37年16万5千尾
〃 野間池	阿宝曾根	〃 19年	明治30年再興
〃 塩屋	塩屋曾根	〃 4年	松ヶ浦と共に盛漁の魁をなす。明治23年廃業
〃 〃	松ヶ浦	〃 4年	〃
〃 秋目	神立曾根	〃 26年	
〃 〃	千貫瀬	昭和33年	
〃 〃	太郎ヶ曾根	明治16年	
薩摩郡下甑	もどり曾根	〃 30年	
〃 里	前ノ曾根	〃 29年	
〃 上甑	五郎紗曾根	〃 29年	
〃 京泊	袴曾根	〃 31年	
指宿郡川尻	きだか曾根	〃 20年	再興年次明治20年。塩屋と同じ、起業は古い
〃 〃	大魚曾根	〃 21年	〃
〃 山川	角曾根	〃 18年	
〃 児ヶ水	梶ヶ瀬	〃 24年	
〃 水成川	今磯根	〃 32年	
出水郡阿久根	合ノ曾根	大正2年	大正3年より数年間好成績
〃 〃	三百曾根	明治23年	
日置郡申木野浜浦	高松曾根	〃 21年	
肝属郡伊座敷	大曾根	〃 37年	大正11年より同14年まで盛漁
〃 大泊	岬曾根		
〃 内之浦	口の瀬	〃 32年	
〃 岸良	鳥島曾根	〃 28年	

(鹿児島県水産試験場水産調査報告を基礎に坊泊水産誌より補充⁴⁾)

「かぶし釣り」は大量の餌を投下して、漁船10数隻、漁夫100人以上で行う大がかりな漁法であった。つまり、「海に蔵を立てる覚悟で惜しみなく餌を捨てる²⁾」。それだけに危険を伴い、とても個人の資力では出来なかった。そのため合資(共同経営)という形がとられた。その組織はつぎのようなものであった。

以上のように、各地で合資方式によるぶり飼付け漁業が行われていたが、新商法が施行されて間もない1893(明26)年に枕崎、坊、加世田の鰺漁株式会社が設立されている。次いで1901(明34)年に野間池、山川、その他が株式組織で運営されるようになった。

なかでも坊泊鰺漁業株式会社は1893(明26)年、『ロンドンタイムズ』に「その株は日本第一位、

世界第二位」と賞賛されるほどの経営規模を誇り、併せてぶり飼付漁業が世界に紹介された。

1933（昭8）年明治漁業法の第七種ぶり飼付け漁業件数は総数23件、行使件数6漁場である。漁獲高は24,300尾、4万6千円、漁船9隻（1隻動力、他は無動力）、漁夫総数108人、1隻8～18人、漁期は9～3月と繁栄期の一漁場にも満たない状況となった。1897（明30）年ごろの漁期は12～2月で、2月の「節分ぶり」が重要な地位を占めていた。

2. 漁業技術の発達

1) その推移

160年ほど前の天保年間⁵⁾（1830～1844）のころ、坊津町と枕崎市との境界近くの赤本浦付近の長瀬を根拠に、両村の漁夫が入会し、模合を組織して、キビナゴの活き餌でブリを竿釣りしたと伝えられる。また坊泊漁夫が坊湾口の横瀬で漁場を変更して活餌釣りをを行い、一隻50～100尾の水揚げをしたとのことだ。

当初は撒餌釣りと呼ばれていたから、ブリの習性は既に経験していたと見られる。1830（天保元）年ごろ坊泊の郷土が経営したものの成績を上げられなかった事が古記録にある。また揖宿郡額娃村川尻では1866（慶応2）年にきたか曾根の創業が記録される。

当時のブリ釣りにはある種の改良工夫があったことが察せられるが、大量に餌を使うという技術の展開が、飼付漁業の発展に寄与している。餌経費の調達、不安定な漁獲のつなぎを、当初は数人の模合、共同出資の「座」の設立、組合などにより、また1893（明26）年の商法施行による株式会社または有限会社によりさらに戦後は漁業法による漁協自営、生産組合による経営へと推移した。いずれも個人企業としての維持の困難なことを証明している。

2) ぶり飼付漁業の概要

(1) ぶり飼付漁場の設定

あらかじめ共同漁業権として漁場が設定されており、一般には低質が砂、砂泥状の水深45～100mの曾根が選ばれる。漁獲能率からは60m前後が良いとされる。

(2) 釣場の設営

釣用係船策設営（野間池）の例

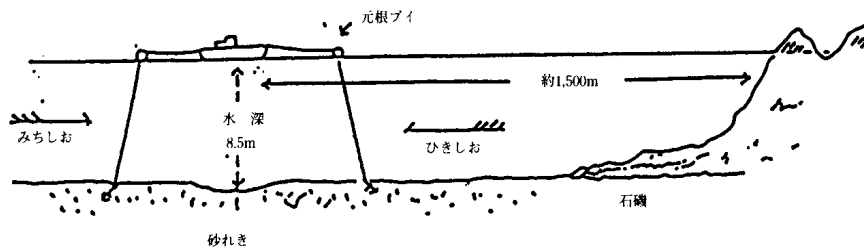


図1. 係船索設営団

ブリは砂泥のような場所に滞留すると言われ、伝統的に知られた場所に浮標を設置し、碇やロープで固定する。根碇は石塊を入れた籠で、これと浮標綱、浮標、係留策とを結ぶ。以前は竹や藁縄が主であったが、現在はビニール、発泡スチロール製ボンデンへと変わった。

(3) 餌料の事前、事後の投入

魚群が餌に付くまで、毎日一定量の餌を投入する。漁期中も漁期終了まで置き餌をする。どんなに釣れる時でも、釣り終わったら必ず置き餌をする。

(4) 漁具

旧来の釣具

鋼製 6~10cm の丸形の釣針に、ちもとは麻製の 1.5m、おもりは鉛製 100~200g、釣糸は麻製 80~150m を用意する。

漁具の変化

戦後すぐ餌袋と称し、口の広い円錐形のものに餌をいれ、逆さまに投入する技術が普及した。しかし潮流の弱いところでは普及しなかった。

現在は図2のように三角かぶせ、ハンカチかぶせの漁法となり、釣針はたるめ釣 30号を使う。

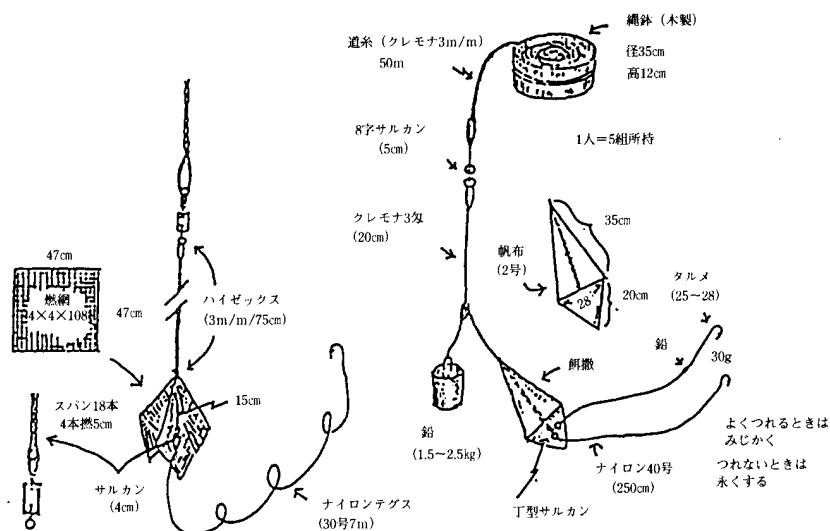


図2. 漁具の構成並びに釣針⁶⁾

(5) 漁法

旧来の漁法

ア. 撒きこぼし法

大羽イワシであれば1~2尾、中羽は4,5尾を目刺しあるいは背刺しにして釣針に付け、その上に10尾ぐらいのイワシを添えて釣糸で包み、更にその上に10尾ぐらいを乗せて釣糸でくるみ、静かにおろす。魚群の位置に至れば、急に糸を引いて餌をまき散らし、釣針に刺した餌に食いつかせる方法である。

イ. 石巻きの方法

撒きこぼしの方法でうまくいかない潮流の強い時は、撒餌をくるむとき 130~150g の石を添えて沈降を速くする。漁法は撒きこぼしの方法と変わらない。

現在の漁法

ア. 野間池の例⁷⁾

朝7時ごろ撒餌、掛餌を積み、あらかじめ設置した係船ロープに船係りする。午前、午後2回餌撒し操業する。午後4時帰港。

漁獲方法に浮き釣りと袋釣の2法があって、漁場の状況によって使い分ける。魚群が多く上層で魚の食いが良いときは浮き釣りで、それ以外の時は袋釣を使う。浮き釣りの際は餌をそのまま水面に撒く。餌は50~60箱を使用(5箱が釣針用, 35箱を撒き, 残り20箱は「すえ餌」として明日に備えて撒く)。餌はウルメイワシが最良であるが、サバ、ムロアジなども使う。メチカを切身で使うこともある。

イ．鹿児島湾口の例

かけ餌はサバ、ムロアジ、ウルメイワシを用い、ウルメイワシが最良。図3のように装餌し、ウルメイワシの場合幹系で1回巻いて投入する。

撒餌は、前日にサバ、ムロアジ、カタクチイワシなどを陸上のカッターで長さ5cm位に切断し、甲板上に氷蔵しておく。餌の使用量は少量時で150～250kg、好漁時は500～1,000kg程度である。

初漁期、終漁期には撒落としにより、探り縄をする。

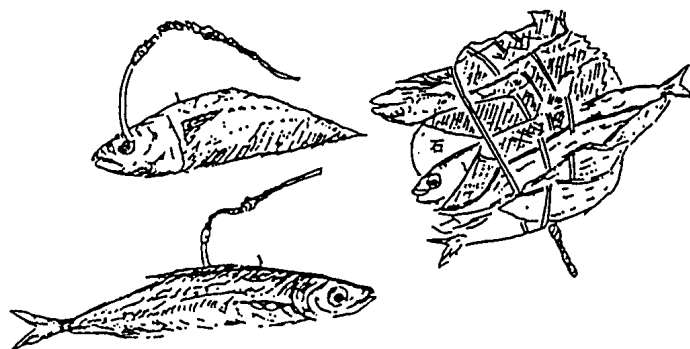


図3．えさ装着法ならびに撒き落とし用撒餌

(6) 漁船

普通3～10ト(6～40馬力)で、乗組員5～10名である。古くは10隻前後連結操業した漁場もある。現在は操業中もエンジン、魚探を動かす。魚が音に慣れてくるとかえって集群の効果があると言う。

(7) 漁期

9月から12月。1897(明30)年は12～2月。旧漁業権では9～3月であった。

(8) 主な漁獲物

ブリ、タイ、ヒラマサで、大部分はブリで鮮魚のまま氷蔵し、トラック等で近郊市場に出荷。

3. ぶり飼付漁業の問題点と課題

1) 問題点

(1) 餌料

多量の餌を必要とすること、出し惜しみは魚群を散逸させること、経費はほとんどが餌代であるから、合理的な利用の研究が必要。

(2) 漁場の寿命

ブリの生態的研究、なぜ砂地の近くに滞留するか等、基礎的研究が少ない。漁場設置の当初は漁獲皆無で、後年に盛漁、終漁、退漁等さまざまなパターンがあり、漁場の寿命は比較的短い。長く続いた例としては55年継続があるが、現在全く漁場価値を失っているものもある。原因としては、定置網などの有効な漁法が発達し、魚群回遊の変動があること、積年の投餌で漁場が荒廃した事などが考えられる。

(3) 飼付漁業の普及

1903(明36)年高知県、1905～1909(明38～42)年長崎県、三重県。1915(大4)年山口県、1927(昭2)年島根県、福岡県に普及したが、鹿児島県のような盛況を見るには至らなかった。長崎県壱岐島では盛況に見舞われ「鹿児島県のおかげ」と今に伝えるという。

(4) ぶり養殖業への応用

かつお餌料の蓄養技術とぶり飼付技法とで、ブリの習性を把握していた県内漁業者は、容易に養殖への転換を行えた。

2) 今後の課題

ブリ漁業の消長は資源が課題である。ブリの漁獲が多かったころはぶり定置網や一本釣りも盛んであった。古来薩南海域はブリの産卵場として知られ、南下して集まるいわゆる「寒ブリ」と、産卵後北上する「彼岸ブリ」が有名であった。現在その生産量はぶり養殖にとって代わられた。多くのブリの稚魚がぶり養殖にむけられる。しかもブリの人工孵化技術は十分でない。養殖したブリを親に産卵から孵化、育成までの一貫した技術体系の確立が望まれる所以である。この技術の完成が海面漁業の再来をもたらすことも考えられる。

4. 参考文献

- 1) 山口和雄 (1957): ブリ漁業, ブリ飼付漁業, 日本漁業史. 210~211.
- 2) 原多計志 (1968): ブリ漁業, ブリ飼付漁業, 鹿児島水産史. 272~273.
- 3) 鹿児島県水産試験場水産調査報告 (1903): 撒餌釣漁場, 91~92.
- 4) 川崎柿堂 (1936): 県下鰺餌付漁場一覧表, 坊泊水産話, 114~115.
- 5) 同上, 坊泊水産話, 81.
- 6) 岩倉栄・塩田正人 (1972): 鹿児島県の1本釣り, ぶり飼付, 西日本海域における一本釣り漁業. 131~135.
- 7) 鹿児島県伝統漁具漁法集 網・釣漁業 (1991); 飼付け, 28~29.

(福元 覚 ・ 徳留 陽一郎)